

昂然と頭を上げよ

英語を翻訳した憲法の前文を「こんなに美しい日本語の文章は他にない」と言う人がいる。「戦争の放棄を世界に堂々と掲げて立つのが最も現実的だと思つ」と現実を目を閉じた理想を説く人がいる。戦後の教育の力である。アメリカが求めた「理想の日本人」が世論をリードしている。

教科書に『日本人の誇り』を

現在、自分の国に誇りを持ってないばかりか「悪いことをしてきた恥ずかしい国」と思っている人が大半である。

それは戦勝国アメリカが敗戦国日本に対して行った「罪意識扶植計画」（戦争についての罪意識を日本人に植えつける宣伝計画）のせいである。

GHQ（連合国軍総司令部）は言論統制や公職追放、教科書の作り直しなどによって日本の歴史を否定し、日本人の魂の空洞化を計り、その空地に絶対的な罪の意識を埋め込んだ。軍隊、軍国主義、国の指導者層が悪かった、国民はその力に有無を言わず従わされて不幸で悲惨な目にあつたと。

アメリカ軍の日本占領は、戦後六年ほど終わったが「罪意識扶植計画」は予想以上の大成功をおさめ、七十年近くたった現在でも多くの日本人の魂を縛りつけている。

これでは独立国の国民の精神の支柱である「国に対する誇りと祖先に対する感謝の心」が育つわけがない。

日本人が誇りを回復するためにつぎの三つの課題がある。

①東京裁判史観のメインドコントロールから覚醒しなければならぬ。そのためには、アメリカとの

戦争のもとになった対中国との戦争の真実を知る必要がある。東京裁判で、南京大虐殺など、真実とほど遠い事件が裁かれたが、こうしたウソの呪縛から解き放されなければならぬ。

東京裁判史観は満州事変頃から昭和二十年の敗戦までの十五年間をひとくくりにしているが、この切り方は日本の近代史の流れにそぐわない。ペリー来航の一八五三年からサンフランシスコ講和条約発効の一八五二年までの約百年、この「百年戦争」としてとらえるほうが妥当である。そして日露戦争やアジア諸国の独立などこの百年戦争がもたらした世界史に残る日本の大殊勲をしつかり胸に刻む。

②アメリカに押しつけられた憲法を捨て、日本人の日本人による日本国のための憲法を作り上げる。

③他国の軍隊に守ってもらっている間は隷属根性から抜けられない。自らの力で自分の国を守る強い軍事力を持つ。対等の力を持つた立場でアメリカなどと対等の同盟を結ぶ。

この三点が実行されれば日本人は本来の誇り高い精神を回復することが出来る。

個より公、金より徳、競争より和、主張するより察する、側隠の情や、わび、さび、ものあわれの美意識など、かつて持っていた日本の、こうした世界でも稀な高

貴な文明は、その根幹となる「国に対する誇りと祖先に対する感謝」が国民の当り前の意識になれば、ふたたび輝きはなつようになる。

以上は一冊の本の大意である。その本とは『日本人の誇り』。福井雄三の「歴史の真実」と内容が共通する部分があるが、より解りやすくバランスがとれた「歴史書」である。

櫻井よしこが「歴史の副読本に採用して、子どもたちに読ませて欲しい」と絶賛した藤原正彦著『日本人の誇り』（文春新書）は、アイウィルの研修でもランキング上位の必読書になっている。「坂の上の雲」「坂の上の雲」に隠された歴史の真実」とともに国民の文字どおりの「必読書」にしてほしいと思つている。

経宮官理講座 307 染谷和巳

現在までの自分の経験が基になっているのは言うまでもないが、参考にした資料が優れていた。政治には秘密があり裏がある。大統領や首相が記者会見で語って新聞テレビで報道されていることは真実でないことが多い。また戦争となればさらに作戦など極秘に立てられるし、戦争を正当化するために国民を欺く宣伝をすることがある。戦果は過大過小に報告される。

「本当はどうだったのか」何十年も前の自分が見ていないことの実事は解らない。誰かが書き残したもので知るしかない。それがウソ八百であっても信じるしかない。司馬遼太郎がウソ八百の「機密日露戦史」を信用し、これをもとに「坂の上の雲」の乃木將軍を描き出したことを福井雄三が糾明したが、このように真相が明らかになるのは稀である。

巨大の上にはウソを積み塗り固めて巨大にして真実らしくしている例は枚挙に暇がない。南京には大規模な南京大虐殺記念館があり、毎日入場者（無料）が列をなしており、韓国は世界中に慰安婦の件を言いふらし、慰安婦像を立てまくっている。

客観的で公正な真実を知ることが出来る資料はないのか。福井雄三は二冊の本を薦めている。

昭和四年まで五年間に渡り中国公使を務めたアメリカの外交官ジョン・マクマリイが昭和十年に書いた「平和はいかにして失われたか」。この本がアメリカで出版されたのが平成三年（一九九一）、

何を基にこの本を書いたか

藤原正彦は対中戦争の真実や当時のアメリカの意図などを縷々挙げて東京裁判史観の否定に努め、昭和十六年満州で生まれてから

「日本人の誇り」はこうした公正客観的な歴史書をベースにしているから説得力ある啓蒙書になったのである。

こうした歴史書の共通点は書かれたのが何十年も前だが、日本で出版されたのは平成になってからの最近であり、藤原はこれらを資料として駆使することができたが、司馬遼太郎はもとより五味川純平そして半藤一利も作品に反映できなかった点である。

日本の誇りに立ち上がる壁

研修で「歴史を学び直して国に誇りを持てる歴史観を身につけてください」と言っている。

だが近隣諸国にペコペコして国益を損なうことを平気でし続ける政治家などの指導者層、そして中

国韓国の主張に同調する新聞やテレビ局などのマスコミをズバリ切り捨てて「日本人の誇り」の側に立つ人はまだ少ない。すべてが子供の時から歴史教育にかかっている。